
神の愛娘

春秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の愛娘

【Nコード】

N7993A

【作者名】

春秋

【あらすじ】

神の子供とは？輝く銀の髪は月の光。大地の恵みの緑は右目。太陽の光は左目。慈母神の偉大なる力の一片を授かりし者のこと。数百年に一度降臨せし者。

伝承（前書き）

投稿はゆっくりですが、気に入って下さると嬉しいです。

伝承

遙かな昔から世界に危機が迫りし時に現れし者あり。

額に抱くは神の口付け。

慈愛の心から生まれし浄化の白き花。

風に愛でられる麗しき光宿せし髪は闇夜を照らす優しき月の色。

それは、闇に惑う人に与えられし優しき希望の光。

御子の慈愛の光を宿し、見るものに祝福を与え、あらゆるものを見透す至宝たりし瞳。

その瞳が纏うは異なりし色彩。

豊かな大地の恵みを表す緑は右眼に宿り、全てを照らし出す太陽の光を表す琥珀は左眼に宿る。

世界の恵みたりし色彩を纏う事を許されし唯一なりし者。

それは、慈母神テロフォーヌの偉大なりし力の一片と慈愛を授かりし聖なる者。

その手に抱くは世界樹より産み出され、意志持ちし御子の半身とな

りし杖。

身に纏うのは神の御子にのみ許されし慈愛神の生み出したる聖衣。

その身を飾り立てることを許されし装飾は世界に唯一の聖銀と聖石より生み出れた麗しき品。

それは神々の祝福を与えられ、祈りを与えられしもの。

その力によりて世界の秩序を守る神の御子たりし者。

神を讃えし人ならぬもの達も彼の者に触れ、その心と思いに膝を付く。

慈愛神が生み出せし神々もまた彼の者を愛す。

そうして、どこまでも気高き心と強き思いを持ちし神の御子は世界に变革をもたらす。

己が唯一の願いを叶えたために。

御子の心のうちを知る者はあるのだろうか？

伝承（後書き）

始まりの神の御子は初代国王の傍らに。

出会い

真つ青な空。ざわめく人々の声。数えきれないほどの人々が行き交うナイトーラ国王都の主道の一つカグナレ。

人々の中をみすばらしいフードを着た子供が頼りない足取りで歩いていた。

何かを探しているのか、辺りをキョロキョロと眺めている。

ドサツ。

人にぶつかり、子供は自分の体を支えきれずによろけ、尻餅をついた。

行き交う人々は自分の事に忙しく子供を気にかける者はいなかった。

ペロツ。

思わず頬を流れた涙を何か温かな物が舐めた。

驚いて見ると隣にいたのは、茶色のふさふさとした毛を持つ犬。

「大丈夫か？坊主」

声をかけたのは、主道に店を出している店主。

頷いた子供に店主は手招きをした。

子供を守る様に犬は少し先を歩いた。

「怪我はないか？」

確かめる店主に子供は頷いた。じつと店主の顔を見た後、子供は堪えきれない涙を溢した。

「おじさん。俺、妹を捜してるんだ」

半分涙のにじんだ声で子供は訴えた。

「拐われたのか？」

同情した様に店主は尋ねた。

「俺、近くにいたのに、守れなかったんだ」

ぎゅっと手を握り締め、拳でぐいっと流れ始めた涙を拭いた。

「父さんも母さんも兄ちゃんも皆、もう見付からないって諦めてるんだ。絶対、妹は生きてるのに」

悔しそうに子供は言った。

「誰も見てなかったのか？」

「…馬車を見たんだ。妹がいなくなった時に。父さんも母さんも信じてくれなかった」

出会い（後書き）

優しい犬の主は？

希望（前書き）

次でエイシャが出て来ます。

希望

「そうか」

店主はそう言つと犬を見た。

「なあ、坊主。まだ時間あるか？」

「時間？あるよ。おじさん、何か知ってるの？」

勢い込んで尋ねる子供に苦笑する。

「手助けしてくれそうな人をな」

それでも食つて待つてな。そう言つて店主は干し肉を手渡した。

店の隅に座つて食べていると疲れが出て来たのかいつの間にか寝てしまつていた。

「坊主、起きな」

ゆさゆさと店主に起こされる。

「うゝん」軽く目を擦りながら、伸びをした。

辺りはすっかり暗くなつていた。それでもカグナレを歩いている人は数が減っているとはいえ、未だに途切れていなかった。

「ミト、今日もご苦労さん。エイシャのところに坊主を案内してくれな」

店主の言葉に答えるように犬ーミトは頷いた。

「坊主、ミトに付いて行きな。エイシャのどこまで連れてつて来れ

る」

「エイシャ？その人なら、妹を、キサナを助けて来れるの？」

必死な様子の子供の頭を店主はぽんと手を置き、撫でた。

「大丈夫だ、坊主。エイシャなら、絶対、力になってくれるからな」
目を合わせ、安心させるように笑いかけた。

「おじさん、ありがとう」

先を歩くミトに遅れないようにしながらも、店主に頭を下げた。最初とは対照的な明るい声に店主の顔にも笑みが浮かぶ。

「おう。氣い付けてな。エイシャによろしく言つといてくれ」

ミトは後ろから付いて来る子供より少し先を歩くように歩調を落としていた。いつもなら、走って帰る。エイシャの元に少しでも早く帰る為に。

ミトが歩む先は、主道のカグナレから細くなつて行く脇道。

迷うことなく歩いて行くミトの後を追いつけながら、子供はキヨロキヨロと辺りを見回した。

元々、王都から荷車で2、3日はかかる場所に住んでいる子供にとって、王都は滅多に来れない場所だった。

さつきまでは妹を捜すことに精一杯で王都を見る余裕はなかった。しかし、今はようやく妹を捜すのに力を貸して来れそうな人が見つかり、辺りを見回す余裕が出てきた。

辺りには帰りの道を急ぐ様々な人がいた。中には、お使いの帰りなのか荷物を持った子供もいる。そのせいかミトと共に歩いていても、

見られることはなかった。

しばらく歩くとミトの足が止まり、続いて子供の足が止まった。

子供の目の前にあるのは、三階建ての煉瓦造りの大きな家。

赤茶色のその家は周りの家に比べても一回り以上も大きかった。

家を更に大きく思わせるのが家より少し低い高さの真つ白な塀。

どこか貴族の家を思わせるその家は家々がひしめくその辺りにはひどく不釣り合いだった。

ミトが止まったことから、ここが店主の言っていたエイシャの家だと分かる。

しかし、思ってもいなかった大きな家に怖じ気付いた。

自分なんかが行ってはいけないような気がした。

ミトはしばらく子供を見ていたが、いつまでたっても動かないのにじれったくなったのか、ぐいぐいっと子供を押し、歩ませた。

希望（後書き）

大きな家に住む、ミトの主は？

エイシャ（前書き）

ようやくエイシャが出てきました。感想をくれると嬉しいです。

エイシャ

ミトは、ドアの前に立つと下の方を前足で叩いた。

「ミト？今日は早いね」

涼やかな銀の鈴を震わせたような声がドアの向こうから聞こえた。
軽やかな足音がし、ドアが開く。

「おかえりなさい、ミト。今日もお仕事、ご苦労様」
ドアが開き、人影が見えた。

まず目に飛込んで来たのは蜂蜜を思わせる濃い金の髪。深く澄んだ
光で色を変える青玉の瞳。柔らかな紅色の唇。華奢な体に鮮やかな
色彩を纏った15、6歳ぐらいの少女。

最高級材料与職人が細心の注意を払い造り上げた人形のような少
女。けれど、決して人形に浮かべることの出来ない優しい微笑みを
浮かべていた。

子供は今まで見たこともないほど美しい少女の登場に目を見張り、
動きをとめた。

ミトは、少女に駆け寄ると、ほんのりと薔薇色の頬を舐め、尻尾を
千切れんばかりに振った。

「ミト。今日は早いね。誰を連れて来たの？」

ミトを撫でながら、子供に顔を向けた。

「あつ、あの、エイシャさんはいますか？」

少しうわずった声で我に返った子供は言った。

「エイシャに用なの？だったら、中にいらつしやい」

流れるような美しい動きで立ち上がると子供を招き入れた。
子供は恐る恐る家の中に入った。

「うわあ」

思わず、声を上げた。

外見に反しない広々とした家の中。清潔な室内は整理が行き届き、塵一つない。置いてある物もどれも趣味がよく、調和している。床にしきつめられた柔らかな薄茶色の絨毯は毛玉一つなく、足に心地良い。柔らかな曲線を描く美しい家具のいくつかには、美しい花が飾られている。微かに甘く爽やかな心地良い香りが辺りに漂っている。

けれど、子供が声を上げたのは、数えきれないほどの動物に驚いたため。

家のあちらこちらに動物達が寝そべったりじやれあったりしている。そのうちの何匹かが子供を見つめたが、すぐに目を反らした。

「驚いた？大丈夫よ。この子達はおとなしいから」

優しく、どこか慈愛深い母親の様な笑みで動物達と子供を見た。

「こちらにどうぞ」

部屋の奥にあったドアの一つを開け、子供を招き入れた。

「そこに座って。ナセ、カロ、どいてちょうだい」

大きな椅子に丸まっていた黒猫と茶色と白のぶちの猫が声に答えるように一声鳴くと椅子から降り、少女の足元で甘えるように鳴いた。「起こしてごめんね。ハル達ならカシ達と一緒にいたわよ」

優しく数回撫でると満足したのか二匹は部屋から出て行った。

躊躇いがちに椅子に近付く。不思議な事に椅子はさっきまで、猫が寝ていたにも関わらず、毛一本付いてなかった。

「座って、ちょっと待っててね」

そう言くと少女はドアを閉め、何処かに行ってしまった。

躊躇いながらも椅子に座った。椅子は柔らかく体を受けとめ、背もたれがしっかりと支えてくれる。そっと子供は部屋の中を見渡した。

部屋には、柔らかな灯りがともされ、部屋の中をはつきりと照らし出していた。

部屋の壁はドアを除き、壁一面に数えきれないほどの本が整然と並べられていた。

「やっぱり、お金持ちなんだ」

ぼつりと思わずつぶやいた。

本は貴重品である。本を増やす為には一字一字書き写していく以外に方法がない。一冊の本を完成させるには時間と手間暇が掛る。その為に本は一冊一冊が高価な物となり、庶民の手に入る物ではない。本を手に入れる事が出来るのはお金に余裕のある貴族かお金持ちに限られる。

「俺の頼みなんか聞いてくれるのかな？」

ぼつりと不安げにつぶやいた。

貴族の多くは平民を見下している。平民の薄汚れた自分のような子供を相手にしてくれるのだろうか？

待つてるうちにどんどん不安が募っていく。やっとキサナを助けられると思ったのに。

思わず、悔しげに唇を噛む。

「待たせてしまってごめんなさい」

ドアが開き、少女が入って来た。「はい、どうぞ」

少女が手渡しするのは、冷たい紅茶だった。

「紅茶、嫌い？蜂蜜をいれてあるから、甘いわよ」

躊躇ったまま、飲もうとしない子供に少し困ったように笑いかけた。子供は慌てて首を振るとそっと紅茶を飲んだ。

「美味しい」

思わず出た言葉に嬉しそうに少女は笑った。

「良かった」

冷たく甘い紅茶は美味しかったが、子供の不安を軽くはしてくれな

かった。

香り高い紅茶と蜂蜜のどちらも平民の手に届くものではなかった。それを惜し気もなく出す事事態が身分の違いを指し示す。

「あの、エイシャさんは」

不安に押し潰されないようにと顔を上げ、少女を見つめた。

少女の後から、人が来る気配はしなかった。会ってくれないんだろうか？

心の中にゆつくりと失望の闇が広がって行く。

「ごめんなさい。私がエイシャよ。あなたの名前は？」

柔らかな笑みを浮かべる少女を子供は凝視した。

エイシャ（後書き）

子供の頼みは？

エイシャの答えは？

迷い（前書き）

進みが遅い上に更新が遅くてすみません。
少しでも気に入って頂ければ、嬉しいです。

迷い

「エイシャ？本当に貴方が？」

想像していたのよりも遥かに若く美しいエイシャを疑わしそうに見た。

「ええ、本当よ。それで、貴方の名前は？」

子供の目の前にある椅子に優雅に、まるで蝶が花に止まるようにふわりと座った。

「……ティルト」

「ティルトの頼みは妹さんを探すこと？」

静かなエイシャの声にティルトは目を見開いた。

「なんで、知ってるの？」

小鳥の様に首を傾げ、ティルトを見つめた。

「さあ？どうしてかしらね。それで、ティルトの願いは妹さんを探すことでいいのね？私に頼むかどうかは貴方の自由よ。ゆっくり考えなさい」

ティルトに笑いかけるとコクリと自らが持つて来た紅茶を飲んだ。

そんな僅かな何気ない動きのひとつひとつが流れるように優美で無駄がなく、洗練されていた。

エイシャはただティルトに微笑むだけで決して急かそうとはしなかった。

不意にふわりとエイシャが立ち上がった。真っ白で傷一つない形の良い手で空になったティルトのカップに紅茶を注ぎ、蜂蜜を混ぜた。

「ティルト。私はしばらく部屋の外にいるわ。考えが決まったら、呼んで下さいな。焦ることはないわ。ゆっくりでかまわないから、良く考えなさい。後悔しないように」

「貴方なら、キサナを助けられる？」

僅かに震える不安げな声が問掛ける。

ティルトの問いにエイシャは思案するような表情を浮かべた。

「そうね。絶対、とは言い切れないけど、貴方の妹さんを見つけることは出来るわ。助けられるかどうかは分からなけど、全力は尽すわ」

それだけ言うとそのとティルトの手元に紅茶を置くと、エイシャは静かにドアを開け、部屋から出て行った。

キサナを助ける。それがティルトの誓い。両親や兄弟が諦めても諦めきれなかった。自分のせいでキサナはいなくなった。他の誰が否定してもティルト自身はそう思い、自分を責め続けた。誰もティルトを責めないぶん、より強く。

だから、夜中にこっそりと家から抜け出した。特にアテがあった訳ではない。けれど、そうせずにはいられなかった。

探して探してようやく見つけた力になってくれる人。

此処に来るまでティルトの胸はようやく見つけた手掛りに期待が溢れていた。

しかし、出会ったエイシャがあまりに若かった。キサナを助けられるのか不安になる。

「……エイシャ。妹を助見つけてくれる？出来るのか」

エイシャが嘘を言ってるとは思えなかった。そう無条件で信じられる何かをエイシャは持っていた。

いや、より正確に言うならば、エイシャにまかせれば、大丈夫だと

エイシャなら何とかしてくれると信じられる何かがあるのだ。

「ティルト、答えは明日でいいわ。先にお風呂に入って来てちょうだい。夕食の準備をしておくから」

ドアが開き、エイシャが顔を出した。言われて気付けば、お腹は空いていた。小さな干し肉の欠片だけでは3日も満足に食べていないティルトには到底足りるものではなかった。さっきまでは、緊張と不安と希望でそれどころではなかった。さらに、ふと自分の姿を見下ろしただけ汚れているのか今更ながら気が付いた。ぐぐ。お腹が空いていることに気付いたとたん、お腹が鳴った。顔を赤くしたティルトにクスクスとエイシャの笑い声が聞こえた。

「お風呂に案内するわ。着替えは用意してあるからそれに着替えてね。今着てる分は洗っておくから」

周りを見渡すと、かすかに湯気を立てるお湯に満たされた湯船が目に入った。温度の違う湯船が3つあり、好きな所に入れるようになっていた。

一つ一つがかなり広く、何人でも入れそうだった。

とても地下とは思えない広さと高さがあった。

その後、ティルトはエイシャに連れられ、地下にやって来た。

「ティルト、こっちに入ってね。こっちは女の子用だから」

そう言われ、扉を開けたティルトの目に飛込んで来たのが先ほどの光景だった。

「ゆつくり入って来てね」

中の物は好きに使ってかまわないわ。

それだけ言つと言葉が出て来ないティルトに着替えを渡すと扉を閉

め、エイシャは姿を消した。
「...とりあえず、中に入ろう」

迷い（後書き）

ティルトの決断は？

迷い 2 (前書き)

今年最後の更新です。ほとんど話が進んでないですが、楽しんで頂ければ嬉しいです。

迷い 2

「キサナ」

ぽつりと呟いた。

「キサナ、俺はどうしたらいい」

キサナの最後に見た笑顔が思い浮かぶ。

ティルトの頬を一筋だけ、涙が流れた。

お風呂に入ったあと、渡された服を着た。何度も洗われた服は柔らかく肌に心地良かった。大きさもちょうど良かった。同じくらいの子供がいるのかな？

浴室から出て階段を上がると、目の前に真つ白な猫が座っていた。ティルトを見ると、案内するように立ち上がり、前を歩き出した。ティルトが戸惑っていると、一言強く鳴く。それに促されるように歩き出した。

家の中を猫は迷うことなく歩き進む。ティルトは、廊下に置かれているものをきよきよ眺めながら、歩いた。足元には柔らかな色合いの心地良い絨毯が敷き詰められている。真つ白な壁には、美しい壁掛けや絵が飾られている。所々には、精緻な模様の刻まれた花瓶に生けられた鮮やかな花や家具、珍しく美しいガラス細工や柔らかな灯りがある。全てが調和し心地良い空間を作り出していた。

猫に案内され、辿り着いたのは、焦茶色の扉の前。通りすぎた他の扉と同じく、美しい模様が刻み込まれている。

猫が扉に触れると、重そうな扉は、カチャリと音を立て開いた。中からは食欲をそそる匂いが流れてきた。

「入ってらっしゃい、ティルト」

エイシャはティルトを手招きした。

真っ白なエプロンが良く似合っている。

「ソウもご苦労様。ありがとうね」

得意気にエイシャの足元に擦りよってきた猫ーソウを優しく撫でながら、礼を述べる。ソウは嬉しそうにゴロゴロと喉を鳴らすと、とんとエイシャの肩に飛び乗った。

「甘えん坊ね、ソウは」

くすくすと笑いながら、ソウの喉を撫でる。柔らかなエイシャの笑みにティルトはみとれた。

「ティルト？」

ぼうつと自分を見るティルトを不思議に見た。

「なんでもない！」

頬を僅かに赤く染めながら、必死に首を降った。

「そう？」

まだ首を傾げたままであったが、それ以上追求しなかった。

「エイシャ、出来たぞ。持ってけ」

食堂の奥から24、5歳ほどの青年が顔を覗かせた。背が高く筋肉質な青年は明るい笑みを浮かべ、花柄のエプロンをし、両手に皿を持っていた。

花柄のエプロンは褐色に焼けた青年に何故か違和感なく似合っていた。

「ありがとう、アクシオ」

エイシャは、アクシオから湯気の立つ皿を受け取り、部屋の中央にある十人掛け用のテーブルに並べた。

「坊頭、お前も運んでくれ。エイシャばかり働かすと怒られるぞ」

アクシオはニヤリと笑って深青色の目を片方つぶって見せた。

「怒らないわよ、アクシオ。ティルトはお客様なんだから」

くすくすとエイシャは笑いながら、ティルトを背後から抱きしめた。

「ティルト、座って待っててくれるかしら？すぐに準備を終らせるから」

顔を真っ赤にしたまま、ティルトは頷いた。

「お待たせ、ティルト」

テーブルの上に用意されたのは質素ではあったが、温かな湯気が立ち上る実に美味しそうな料理だった。

「こう見えてもアクシオは料理が得意なのよ」

悪戯っぽく笑いかけてくるエイシャをアクシオが軽く叩いた。

「こう見えてもってどういう意味だ、エイシャ」

「痛いわよ、アクシオ。私はあなたと違ってか弱いんだから、気を付けて」

「誰がか弱いんだ？エイシャ」

子供のような二人のやりとりについて我慢できず、ティルトは笑い出した。

「ティルトに笑われちゃった。アクシオのせいね」

「なんで、俺の」

アクシオの文句を無視してエイシャはティルトに笑いかけた。

「冷めちゃうから、早く食べましょう、ティルト。温かい内が一番美味しいんだから」

そういつて手を合わせ、感謝の言葉を述べ、料理に手を伸ばした。

慌ててティルトも感謝の言葉を述べると、前に置かれたスープを食べ始めた。

「美味しい！」

ぱつと顔を輝かせるティルトをアクシオは嬉しそうに笑った。

全て食べ終わると、エイシャが片付けてる間にアクシオは奥からよく冷えたいくつかの果物を持ってきた。

「ティルト、食べるか」

ヒヨイとその内の1つを持ち上げ、ティルトに見せる。

鮮やかなオレンジ色のそれは、つやつやと輝き、甘い匂いを放っていた。

それを凝視するティルトの様子をアクシオは面白そうに眺めた。くるくると、武骨な手は思いの外器用に動き皮を剥いていく。

剥いたそれを食べやすいように一口大に切り分け、皿に盛ると、ティルトの前に置いた。

「食え、ティルト。旨いぞ」

にやにやと笑いながら、ティルトに勧める。

「エイシャは気にしないでいいぞ。あいつは食べなれてるしな」
アクシオは自分も口にする。

それを見ながら、ティルトは僅かに躊躇いながらも、口にした。
「美味しい」

「だろ？そいつは中々手に入らないからな。結構貴重だぞ」

「あら、もう食べてるの？ティルト、味はどう？」

片付け終わったエイシャが奥から現れた。

「あの、ごめんなさい」

思わず謝るティルトの様子にエイシャは笑みをこぼした。

「気にしないでいいわよ。アクシオが勧めたんでしょう。」

軽くアクシオを睨むと、肩をすくめた。

「ティルト、ベツトは用意したから、後でアクシオに案内して貰って。それから、明日の昼過ぎにならないと私は来れないんだけど、それまでに私に依頼するか決めておいてね」

「……はい」

優しくけれど、厳しさも伴った声がティルトの心に響く。

迷い 2 (後書き)

ティルトの選ぶ道は？

結論（前書き）

久々の更新ですみません。
待っていて下さる方がいると嬉しいです。

結論

「ティルト、寝るか？部屋に案内するぞ？」

エイシャが姿を消したあと、全てを片付け終わったアクシオがティルトに声をかけた。

眠そうに目を擦っていたティルトは、こくりと頷いた。

薄暗い家の中、闇に浮かぶものや輝く動物達の目に怯えながら歩くティルトにアクシオが笑う。

「ティルト、大丈夫だ。ここに危険なもんは入ってこれないし、危険なものはいないからな」

そう言つて、ティルトの片手を握った。

堅いアクシオの手の温もりにティルトの顔が緩んだ。

「着いたぞ、ティルト。今晚はここで寝な」

アクシオが連れて来たのは、あまり大きくなく質素だが居心地の良い清潔な部屋。豪華な部屋ではティルトが休めないだろうとエイシヤが選んだ部屋だった。

怖くないように柔らかな光が部屋を照らし出していた。

「ほれ、ティルト、ベッドに入りな」

躊躇うティルトの背を押し、ベッドに入るよう促す。そろそろとベッドに潜り込んだティルトの頭を軽く撫でる。

「おやすみ、ティルト。いい夢が見られるといいなあ」

返事をしないティルトの様子に軽く肩を竦めるとアクシオは部屋から出ようとする。

「待つて」

「どうした？」

急に声を張り上げたティルトに、ゆっくりとアクシオが近づく。

その表情に怒りや侮蔑は見られない。その事にほっとしながら、近づいてきたアクシオを見上げる。

「どうした、ティルト」

「……………アクシオはエイシャの事を信じてる？」

顔を半分だけ布団から覗かせ、迷いつてることを表しているような細い声がアクシオの耳に届く。

「ティルトは、エイシャが信じられないか？」

責める響きのない穏やかな声にティルトはビクツと体を震わせた。

「……………分らない」

ポツリと呟くとそれ以上ティルトは口を開こうとしなかった。

ベッドの近くに寄ると、すぐ側に用意してあった椅子に腰掛けた。

（相変わらず、用意のいいことだ。予想、してたんだろうな、エイシャの奴は）

内心そう思いながら、アクシオはゆっくりとティルトの頭を撫でた。
した。

「なあ、ティルト。ティルトが不安なのは、エイシャが若いからだろう？あと、金持ちか貴族だっと思ってるからじゃないか？」

穏やかな声でティルトの不安の元を当てると、アクシオは話始めた。

「その不安はお前だけじゃないさ。エイシャに初めてあった奴は皆そう思うからな」

微笑かに笑いを含んだ声にほっと安心すると共に皆が迷うと聞いてティルトの心は少し軽くなった。

今までは、親切にしてくれるエイシャに不安を感じることにティルトは申し訳なく思っていた。

アクシオは話しながらもティルトの頭を撫で続ける。

その手のぬくもりと話し声がティルトには心地良かった。

「俺はエイシャの事を信用してるし、信頼もしてる。エイシャは確かに若い。けどな、あいつは自分の事は良く理解してる。」

あいつは出来ると言ったことは絶対に成し遂げる。それにエイシャは引き受けた事には常に全力を尽くすし、身分や地位や金なんかで差別はしない。あいつに助けられた者も多いし、頼る奴も多いぞ。例えば、この近所の奴らは、困り事があるとエイシャに相談に来るし、用がなくても遊びに来たりするしな」

じつと話を聞くティルトに笑い掛けるとアクシオは更に続けた。

「だがな、ティルト。これは俺の意見だ。お前は難しく考えなくていい。あいつが信頼にたるかどうかお前の目で見たエイシャで考えな。お前が選ぶ事だ。後悔のないようにな」

コクリとティルトが頷くのを確認すると満足げにアクシオは笑う。

「疲れただろう。考えるのは、明日でも構わんさ。今は、ゆっくりと休みな。疲れた頭じゃ、いい考えは浮かばんからな」

そう言つて、ポンポンとティルトを布団の上から軽く叩く。

「お休み、ティルト」

そう言つとアクシオは部屋を出て行つた。

ティルトが今度はそれを止める事はなかった。

（どうしよう。エイシャの事は、信じられる、と思う。肉屋のおじさんもエイシャが助けてくれるって信じてたし。それに、エイシャはあんなに薄汚れてた僕に笑い掛けて、優しくしてくれた）

ゆるゆると横たわるティルトに睡魔が忍び寄る。

疲れきつた成長期の体では、それにあがらう手段はなく、眠りにつく。

最後に浮かんだのは、キサナとエイシャの笑顔だった。

結論（後書き）

己を正しく見るのは年老いた者にも難しい。
何故、若き少女に可能なのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7993a/>

神の愛娘

2010年10月16日00時18分発行